

interview インタビュー

2000年のシドニーオリンピックで銀、2004年のアテネオリンピックで銅と、ふたつのメダルを獲得した女子ソフトボール日本代表チーム。このチームを率いた宇津木妙子氏に、ソフトボールとの出会い、オリンピックをめぐる思いなどをお聞きした。昨年度、ゲストとしてお越しいただいた東弁の運動会については「人と人とのつながりを大切にする催し、これからも続けてください。お声がかかれば、またぜひ」とのコメントをいただいた。

(聞き手：鹿野 真美)

プロフィール うつぎ・たえこ

埼玉県出身。中学時代からソフトボールを始める。社会人ではユニチカ垂井に所属。1985年現役引退後は日立高崎の監督に就任、全日本総合選手権に5回、日本リーグに3回優勝。1997年日本代表監督に就任。2000年シドニーオリンピック銀メダル、2004年アテネオリンピック銅メダル後、勇退。現在は講演や後進の指導などの活動にあたっている。著書に「努力は裏切らない」「宇津木妙子ソフトボール入門」等がある

女子ソフトボール
日本代表元監督

宇津木妙子さん

——ソフトボールを始めたきっかけはどのようなことだったのですか。

ホント些細なことです。中学校が家から自転車で1時間くらいかかる遠いところにあって、となりのうちの先輩がソフトボールのピッチャーをやっていたんで、自分もソフトボール部に入れば一緒に帰れるから、というそれくらいの軽い気持ちでスタートしたんです。

——そのような些細なきっかけで始めたソフトボールを続けてこられたのはなぜでしょう？

どっちかというとなげず嫌いの性格だったのがよかったんじゃないかなという気がしますね。もっと上手になりたい、試合に出る以上勝ちたい、そういう目標があったこと、それから、一緒に頑張れるチームメイトがいたこと、それが大きかったんじゃないかと思います。

39年間のソフトボール人生を振り返って、出会いに恵まれて、そのときどきに目標、夢が持てて、それを達成できて、私ぐらいすべてにさせていただいた人はいないと思いますよ。

——ただ、大変な思いをされたことも多かったのではないのでしょうか。たとえば、アテネオリンピックのときなど…。

振り返って考えると、アテネで金を取れなかったのは、私自身、シドニーオリンピック以降、どこかで自分を見失っていて、本来の自分のソフトボールというものを地に足をつけて指導できなかったのが一番の原因だと思います。

2002年にルールが改正になって、バッテリー間が約1メートル長くなりました。よく「アジア泣かせの改正だ」とも言われましたけど、ルールはどこかで変わることがあるわけで、それが原因で負けたとか言いたくないですから。



もっと上手になりたい、試合に出る以上は勝ちたい：目標があり、そして一緒に頑張れるチームメイトがいたからこそ、私はソフトボールを続けてこられました。

やはり、マスコミや皆さんが注目してくださったことで、どこかで格好つけてたところがあったんですね。これまでどおりにやっていたつもりで、できていなかったんだと思います。

——あの熱狂的な雰囲気の中で、そのような「つもり」になってしまうのも無理はないと思います。

「つもり」になっていて失敗する、ということは何にでも当てはまると思います。うちの会社は大丈夫だ、うちの子は関係ない、とチェックもしないで思い込む。そして、実際に災害や不祥事が起きたり、自分の子どもが問題を起こしたりすると、「そんなはずはない」「うちの子に限ってそんなことはないと思っていたのに…」と大騒ぎする。

「うちは大丈夫か」と常に再確認することの大切さは、いろいろなことに関して言えるんじゃないかな。

——アテネオリンピック後、講演を依頼されることも多いようですね。

私はどこの学校を出たというわけでもないのに、講演を頼まれてもあまりきちとした話はできないんですが、今回のアテネオリンピックで体験した、上から落ちることの苦しさについては、伝えることができる部分もあるのではないかと思います。

また、アテネの監督の話がきたときは、金メダルをとれるかもしれないけれど、4位内に入れないかもしれない、そういう覚悟の中で私は引き受けました。シドニーの銀といういいところでやめれば楽だったかもしれないけれども、自分でまたチャレンジしたわけだから。どんなことでも、そういう覚悟の中でビジョンとモチベーションを持ってやらないとだめなんじゃないかと思っています。

——監督のお仕事というのが、ご自身一番好きで向いていらっしゃると思われませんか。

それはやっぱり選手がいいですよ。

守備位置について、ボールが飛んできて、取って投げて「アウト！」と言われるまでのあの緊張感、整列

して「ありがとうございました」と挨拶するときのあの気持ち、あれは選手にしかわからない。だから現役にはこだわりたい。

ただ「遊び」のはやりたくないですね。もちろん、人それぞれですから健康のためにやるというのも、それはそれでいいと思います。でも自分は常に勝負だと思っています。楽しかったから負けてもいいや、ということにはならないですね。勝ちにこだわることは大事じゃないかなと思います。

——最近の教育の現場では、勝ち負けにこだわらないほうがいい、運動会でも1等、2等などの順位をつけない、それが「平等」だというような風潮もあるようですが。

その一方で勉強ではちゃんと順位がついて、ナンセンスですよ。個人個人、命はみな平等、でも一人一人見たときに、この子は美術に長けている、この子はスポーツが得意、この子は頭がよくて理数系が得意、とか、いろいろあっていいじゃないですか。世の中、いろんな人たちがいていいと思いますよ。

選手によく言うのは、キャッチボールをしても、いいボールばかり返せるとは限らないよ、悪いボールをどう取ってくれるかというのがチームメイトだし、いいボールでも落とすときもある、そういう人と人との関わりあいの中でソフトボールは出来上がっているし、世の中もそうだよ、と。

ただ、私がそうやって言っていることと今の社会が変わってきているから、一人でも生きられる部分もあるから、辛いなぁと思うときがありますよね。

(構成：鹿野 真美)